

# 火星



平成18年 8月号

# 七曜抄 (三)

山尾玉藻

でで虫に平均台の端のあり

麦秋の日中を泣きに来たる人

モツ、レバー食うべし顔に南吹く

コーリアン市場くはしく梅雨に入る

金魚田の匂ふ二階に待たされし  
夏霞臀はたいて起ちにけり  
ハンカチを畳みて鳩の浮巢まで  
かはほりの空の下なる痴話喧嘩  
螭蛄を釣り来し手足眠たがる  
鍵善に父と来てゐる夏の雨

# 太白星

柳生千枝子

らつきようを真珠の如く漬け了る  
林檎噛む青春の音たてて噛む  
下関は想ひ出の町夏霞  
灯の下に水張る器火取虫  
朝涼し素足ま白の幼な児よ  
関りなき離婚話を涼み台  
蟬時雨遠き消息聞くやうな

杉浦典子

芭蕉庵の芭蕉の花の咲けるころ  
日の差して影のありけりかたつむり

みづうみに高波のある桐の花  
優曇華を七人に見てもらひたる  
黒日傘袋小路に入りにつけり  
緑蔭に肉あぶる火を熾しをり  
寄りにけり青葉濃き日の浄春寺

浜口高子

焼酎の置きある闇のつめたかり  
竹皮の脱げさう蹄ひびくたび  
閻王の胸に角出すかたつむり  
麦飯の湯気の中なる伊勢木綿  
みんなぬなくなりしベンチや烏賊釣火  
一番に水の入りけりほまちの田  
皺の掌に動く気のなきかたつむり

# 火星作品

## 山尾玉藻選

放課後の机小さく夕焼くる  
豊中 廣畑 忠明

釣舟にエンジン匂ふ走り梅雨

庭下駄のなじむふるさと麦の秋

年寄の上手にあそぶ更衣

老鶯や頬の飯粒母が喰ぶ

日の差して動き出したる芹の水  
八幡 大山 文子

田が植わり太極拳の手足かな

鹿の糞新し茅花流しかな

穴掘りのひと休みせる銭葵

満開の牡丹雨雲呼びにけり

めだか百水に方向生まれけり  
穴栗 大東由美子

水平に刀置きある五月闇

手の平にひつつきにける緋の目高

雨蛙 暈 いつぱい 本 広げ  
 子規 庵の庭 棚つたふ 五月 雨  
 水にほふ 八十八夜 の葬り かな  
 ぼうたんや 潜水艦の浮いてぬる  
 鐘楼に垂れし 電球 夕薄 暑  
 麦秋の音 してまはる 風車  
 南吹く ジャンジャン 横丁 真つ直ぐで  
 はるけくも 紛ふことなし 山法師  
 鐘を撞き 励ますことも 梅雨 菌  
 早退や 蚊帳 吊草を 手ぐさにし  
 どくだみの 残らず 抜きしたなごころ  
 藤棚の 風に 真昼の 過ぎてぬし  
 用なしの 夫に 用あり 松の花  
 桐咲いて しばらく 父と 歩きけり  
 この 島の 玉葱 太る 風の音  
 麦の 秋 姪が ねむりに 来てをりぬ  
 初夏の 端につながる 遊覧 船

大和郡山 城 孝子  
 明石 戸栗末廣  
 八幡丸山 照子

# 選のあとに

山尾 玉藻

「潜水艦」を抵抗無く包みこむのも牡丹の力である。

めだか百水に方向生まれたる

大東由美子

年寄の上手にあそぶ更衣

廣畑 忠明

楽しく、嬉しくなるような句である。もしかすると似たような句があるかも知れないが、こう言う句に限っては多少の類似性は許されるであろう。「更衣」は、当然お洒落の素である。忠明さんは「老人」と「年寄」の違いをよく心得ている。この句は「年寄」が良く、「年寄」でなければならぬ。

満開の牡丹雨雲呼びにけり

大山 文字

ぼうたんや潜水艦の浮いてゐる

丸山 照子

〈牡丹散つてうちかさなりぬ二三片 蕪村〉へ火の奥に牡丹崩るるさまを見つ 萩郷、両句共に美の極限を詠ったもの。しかしモチーフは全く違う。この句に限らず、牡丹と云う花の存在はあらゆるものに対応出来る懐の深い季語である。

文字さんの句の「雲呼びにけり」は、能動的で一般には失敗し易い表現であるが、掲句の場合はこの表現で成功している。「牡丹」と云う季語の力に拠るところである。

照子さんの故郷は、広島尾道と聞いている。掲句、牡丹の花どきの千光寺辺りからの景であろう。無機的極まりない

跳びつきし手足なりけり青蛙

米澤 光子

「跳びつきし」は、勿論作者の肌に直接「青蛙」が付着したのである。「手足なりけり」の何でも無さそうな表現が、この句では最善である。四つある足を全身で感じたのである。両生類、のびしゃとした触感は何とも気味悪く気持ち悪い。

青嵐神は鴉に濡羽いろ

金澤 明子

「鴉の濡羽色」は既成語と云うか、慣用語である。しかし、日常生活の中での鴉の色は只の黒としか見えない。実際に濡羽色を感じるのには、場所と時間、それも一瞬に過ぎないのである。とある神社で、はっとするような紺がかつた鴉の濡羽色を作者は見定めたのである。季語「青嵐」は的確である。



# 恒星圈

田中英子

敦盛のこちら向きなるゆすらうめ  
足早の人に蹤きゆく夏落葉  
靴音の止まる五月のアスファルト  
夕べとは母に供へる柏餅  
牛小屋に入つてゆきぬしやぼん玉

高尾豊子

田中みのる

玉砂利の音の乾きし薄暑かな  
二十年ぶりの握手や冷し酒  
丸の内ビルのめばるの煮付かな  
露叢に残れる露の匂ひかな  
友達の家に 嬰生る 桐の花

境内に解脱の言葉罌粟咲けり  
真つ新の家に 翩翻鯉のぼり  
お茶席の亭主に学ぶ鉄線花  
屈原げんてふ義人ありけり粽解く  
藤たるるお菊神社の皿まつり

高松由利子

土屋酔月

楽箏の運び込まれし牡丹園  
下戸の靴揃へてありし一夜酒  
海と空ひとつ色なり岩燕  
仕来りは浜の男の初鯉  
夏服の膝へ凭せしチェロケース

鳥帰る生きて別れを重ねけり  
からたちは白秋の花刺の花  
目の中のものみな揺る青嵐  
白牡丹色なき水をこぼしけり  
暮なづむ風のたわわに花水木

# 獅子座

山尾玉藻推薦

山田美恵子

帰省の子仏間に枕持ち来たる  
五月雨を聞く父の盃夫の盃  
たんぽぽの絮求愛の羽に触れ  
花形の水打つことも芝居小屋

永嶋みね子

新墓のあらぬ処に今年竹  
境内の防火馬穴のかたつむり  
腰低く飛田新地の水を打つ  
気のすむまで子はたんぽぽの絮飛ばす

助口弘子

テーブルの向う過ぎたる夏帽子  
杖持つも万緑の中あゆみけり  
日々のこと二人でこなし心太  
芥川街道高く夏燕

大城戸みさ子

近うなる鐘の音梅雨の兆しかな  
麦飯の湯気の立ちぬる仏間かな  
眠れざる歯を磨きをり新樹の夜  
若葉風の広縁に組むピンポン台

高橋芳子

幾度もビリケン撫でて緑蔭へ  
走り梅雨オール電化に起こされし  
授乳室に人影卯の花腐しかな  
欄干の猿の見てゐる五月川

河崎尚子

湖人に花馬鈴薯の乾きをり  
瑠璃蜥蜴もう使はれぬ登り窯  
輝ける水棒と吐くダム薄暑  
椎の花もたれし背中ぬらしけり

長田曄子

みささぎへ道のはじまる木下閣  
あやめ草超軽量の傘さして  
新樹光ぬけゆく絮に重さあり  
水輪生む目高の桶に日の差せり